



「地球大百科事典」
井田喜明・木村龍治・
鳥海光弘 監訳

朝倉書店, 2019年10月

上巻 地球物理編: 580頁, 18,000円 (税別)

ISBN 978-4-254-16054-3,

下巻 地質編: 795頁, 24,000円 (税別)

ISBN 978-4-254-16055-0

本書は、オックスフォード大学出版局から出版されている“The Oxford Companion to The Earth”の和訳書である。原著は、音楽、芸術、文学、科学、軍事などを網羅した百科事典である Oxford Companion シリーズの1冊である。監訳者は上記の3名の方々であるが、実際に翻訳の労を執られたのは、各分野を代表する総計29名の方々である。「監訳者の序」に書かれているように、本書に記載されている範囲は、惑星、大気、海洋、地質、古生物、固体地球、さらには、資源、環境、公害、建築物の岩石、教会建築に用いられている歴史的石材についての説明に至るまで、地球科学のほとんどの分野を網羅している。本書はページ数が膨大になるため、上巻・下巻の2分冊に分けられており、上巻が大気・海洋を含む地球物理編、下巻が地質編となっている。上巻には大項目として、地球物理学・地球科学一般、地球化学、プレートテクトニクス、惑星科学、気象学、気候と気候変動、海洋学が取り上げられ、下巻では地質学、環境地質学、構造地質学、地質年代学、堆積学、古生物学、鉱物学、水文学、地形学、土壌学、水河学が取り上げられている。ここでは気象学会会員の皆さんが主に興味を持つであろう上巻を中心に紹介したい。上巻には合計331の小項目が掲載されているが、そのうち気象学、気候学、および海洋学に該当するのは100項目である。ということは、気象学・海洋学が地球物理学全体に占めるシェアは約30%と考えることができるかもしれない。

従来の地球物理学関連の事典は語句の説明が主であったが、本書は語句の説明にとどまらず、関連項目の説明や、その歴史、さらには地球物理学における位置づけ等についても述べられている。たとえば、「降水」の項目を見ると、その測定の方法として雨量計に始まりレーダーや衛星観測に至るまで観測技術が紹介されているのと同時に、降水を伴う現象としてストー

ムトラックや熱帯低気圧などが詳しく紹介されている。さらには、雲粒から雨粒への成長過程として、雲粒と雨粒との落下速度の差に伴う併合過程、および液相と氷相の飽和水蒸気圧の差に伴う昇華凝結過程も定量的な数値と共に詳細に記述されており、教科書的な側面もある。実は、昇華凝結過程に「ベルシェロソフ・フィンダイセン過程」という固有名があることを本書ではじめて知った。このような徹底した記述は読者にとって自分の直接知りたい事項だけでなく、その近隣分野の知識を得る上で大変貴重な資料である。想定外の情報が得られることもあるかもしれない。さらに、各項目には参考文献も記載されているので、もっと深く知りたいと思った時の足がかりとすることができる。

本書は事典であるので、各項目は50音順に並べられている。これに加えて巻頭にはテーマ別項目の一覧が掲げられている。この一覧を見れば、様々な分野がどのような拡がりを持っているか、一目瞭然である。自分の専門分野ならどんな項目があるか全部知っているという方も多いだろうが、この一覧を利用すれば隣接分野がどのような項目を持っているかを知る上で大変役立つであろう。

監訳者の序にも書かれているように、このような各項目に対する徹底した解説は、事典は項目の網羅的な記述をするものであるというイギリス人の基本姿勢のなせる技であると同時に、科学という近代合理主義を作り上げてきた人たちの自負心によるものであるかもしれない。このような点は、私たち日本で科学を志す者も見習うべきであろう。

ひとつ気になったのは、原著の出版が2000年とやや古いことである。そのため、本書で説明されている事項も2000年当時の知見を基にしており、年々変動の図などもすべて1990年代半ばで終わっている。もちろん、2000年時点での知見であっても全く問題ない事項も多数あるが、たとえば1990年代末に始まった地球温暖化の停滞やその後の昇温の再加速など、本書で網羅できない分野もある。将来原著の改訂版が出版された時には、その訳書である本書も改訂版として出版されれば、最新の地球科学をより深く理解するための座右の書としてさらに役立つものになるに違いない。

最後に、多くの事典の場合と同じように、本書も個人として購入するにはやや高額である。近くの図書館に購入要望を出して、時々借り出して読むのも一案かもしれない。